
悪魔のカレー

坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔のカレー

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ある店の裏メニューにあるという恐ろしく辛いカレー、そのカレーを食べてみると。ユーチューブの漫画動画のオマージュ作品です。

第一章

悪魔のカレー

そのカレー屋のカレーは美味しいので評判だ、兎角ルーの味がいい。インド人という店長のマガバーンディヴァは浅黒い肌と口髭という如何にもインド人という外見である。彫のある顔も如何にもだ。

カレーは甘口もあれば中辛もあり辛口もある、ビーフカレーもあればチキンカレーにポークカレー、シーフードカレーもある。

カツカレー、海老フライカレー、ソーセージカレー、ハンバーグカレーも人気だ。その彼の店にはだ。

ある噂があった、何でもだ。

「すげえ辛いカレーがあるらしいな」

「もう普通のカレーの何十倍も辛い」

「地獄みたいなカレーがあるらしいな」

「何でも裏メニューがあって」

「そのカレーがそうらしいな」

「その話本当か？」

常連の一人である地元のある企業で部長をしている山中敬之が応えた、面長で黒目勝ちの小さな目でやや曲がった感じの口元である。背は一七七程で痩せていて黒髪を短くしている。

「あの店俺もよく行くけれどな」

「美味しいですかあね、あそこ」

「俺達もよく行きます」

「馴染みです」

「流石インド人の美味さですね」

部下達は山中に笑顔で応えた。

「あそこいいですよ」

「マジお勧めです」

「また行きます」

「それでカツカレー食います」

「俺はシーフードカレーにします」

「いや、そうしたメニューもいいけれどな」

山中は部下達に真面目な顔で返した。

「あそこに裏メニューがあつてな」

「ええ、地獄みたいに辛い」

「そうしたカレーがあるらしいんですよ」

「噂ですが」

「そんな話があるんですよ」

「俺はカレーが好物なんだよ」

山中はここでこう言った。

「だからな」

「それで、ですね」

「あの店にもよく行かれてますね」

「部長も」

「そうですね」

「俺は煙草もギャンブルも女遊びもしないがな」

実際に山中はそうしたことは全くしない。

「カレーを食うのは生きがいだな」

「そこまで好きで、ですか」

「あの店にも行かれて」

「それで、ですか」

「あの店の裏メニューもですか」

「そう聞いたらな」

それこそというのだ。

「食わずにいられるか、それじゃあだ」

「今度あの店に行かれたら」

「その時はですか」

「そのカレーを注文されて」

「そうしてですか」

「どんな辛さ、どんな味か確かめる」

部下達に真顔で話した。

第二章

「言っておくが俺はどんな甘いものも辛いものも食える」

「カレーですか」

「伊達にカレーが生きがいじゃないですか」

「だからですか」

「ああ、だから今度行ったらな」

その店にというのだ、尚店の名前はアグニという。

「裏メニューのカレー食って来るな」

「その時は感想下さい」

「どんなカレーだったか」

「そうして下さいね」

「ああ、待っているよ」

部下達に笑顔で応えてだった。

山中はその日の昼に店に行った、そしてインド風の店のカウンタ―の中にいるディーヴァにだった。

決意している顔でだ、こう言った。

「裏メニューにあるっていうな」

「あのカレーをですか」

「実際にあるんだな」

「実は新メニューでまだお品書きに書いてないだけです」

ディーヴァはカウンターの席の一つに陣取る山中に答えた。

「裏じゃないですよ」

「そうなのか」

「はい、じゃあ地獄カレーをですね」

「それがそのカレーの名前か」

「はい、そうです」

山中にその通りだと答えた。

「それじゃあ地獄カレーをですな」

「貰おうか」

「わかりました」

こうやり取りをしてだった。

山中はそのカレーを前にした、ここであった。

他の客達は唸ってだ、口々に言った。

「本当にあったか」

「っていうか裏でもなかったんだな」

「俺達も注文出来るか」

「じゃあ今度注文するか？」

「そうしてみるか」

こんな話をしていた、そして。

山中は食べた、その瞬間にだった。

表情が一変した、驚愕したものになり。

一瞬で顔が真っ赤になった、そして汗が噴き出る。客達はその彼を見てわかった。

「ああ、名前の通りか」

「地獄か」

「地獄カレーなんだな」

「滅茶苦茶辛いんだな」

「そうなんだな」

「某バルツで言うとお百倍です」

ディーヴァがここで言ってきた。

「そこまでの辛さです」

「百倍か」

「はい、二十倍ではなく」

それでは済まずというのだ。

「百倍です、黄色い唐辛子とハバネロをです」

「あの辛いってどうか」

「はい、ふんだんにです」

食べる山中に話した。

「使いました、どうでしょうか」

「俺も色々なカレーを食ってきたが」

山中は身体全体を真っ赤にし汗を噴き出し続けながら話した。

第三章

「こんなカレーははじめてだ」

「そうですか」

「だが俺はカレーならだ」

この料理ならというのだ。

「何でもだ」

「召し上がられてきましたか」

「そうだ、だからな」

それ故にというのだ。

「このカレーもだ」

「完食されますか」

「カレー好きの誇りに賭けてな」

こう言ってだった。

山中は身体中を真っ赤にし汗をサウナに入っているかの如く流しつつもそのカレーを食べていった、そうして。

完食してだ、ディーヴァに言った。

「俺はやったぞ」

「お見事です、では完食の記念写真を」

「撮ってくれるか」

「はい、よく完食されましたね」

「言ったら、俺はカレーが生きがいなんだ」

山中は瀕死の様でそれでいてやり遂げた顔で語った。

「だからな」

「どれだけ辛いカレーもですね」

「完食するんだ、しかしな」

それでもとだ、彼は言った。

「ここまで辛いカレーはな」

「はじめてでしたか」

「ああ、凄かった」

その瀕死でかつやり遂げた顔で語った。

「はじめてだった」

「それは何よりです」

「ああ、よくこんなカレー作ったな」

「研究の成果です、では後日正式にメニューに出しますので」

「そうするんだな」

「その時またお楽しみ下さい」

「次は普通のカレーにするな」

こう言ってだった。

山中は辛さを抑えかつ熱くなり過ぎた体温を抑える為にだった。

口の中に氷を含んだうえで水を飲んだ、そうして汗をひかせてから職場に戻った。そこでこのカレーのことを部下達に話すと。

このカレーの話は忽ちのうちに世間に広まった、悪魔の様に辛いカレーだと。そして一部の勇者のみがチャレンジする様になった、そして完食出来た者はその称号を本物とした。そこに山中もいたが彼は二度とそのカレーを食べなかった。悪魔だと言って。

悪魔のカレー 完

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~27511

悪魔のカレー

2022年09月28日 13時20分発行